

「茶旅」

”こぼればなし”

コラムニスト 須賀 努



観光茶園というものを初めてみたのは、確か数年前タイ北部のチャンライに行った時だったことは前号にも書いた。大企業の作るそれは、規模も大きく、茶園とは言いながら、あくまで茶畑、茶樹はきれいな風景の一環であり、その茶葉は製茶されることはないし聞き、観光客を呼び込む一つの手段だなど、ちよつと残念に思つたものだ。

その際にもう一つ訪れた観光茶園があった。父親が亡くなり、若い息子が跡を継いだばかりだったが、『これからは茶作りより観光業で食べて行きま』とはつきりと言われたのが深く印象に残っている。海拔も低く、良質の茶葉を作り出せないということ、そして彼自身が韓国済州島の観光茶園を見

学して、その将来性を見込んだということだった。実際に、茶畑が一望できるおしゃれなカフェ風テラスで、アイヌ烏龍茶と茶葉が載ったケーキを食べると何だかりラックスでき、とても気持ちよかつた。

中国でもそのような場所は過去にくつか見てきたが、最近行った観光茶園は如何にも中国らしく、ダイナミックなビジネスを行つていた。貴州省といえ、中国で最も貧しい省の一つに数えられ、発展が遅れた地域という印象があつたが、今回久しぶりに訪れてみると、特に政府の肝いりで、観光業と茶業に力を入れている様子がよく分かつた。

省内の有力茶産地である湄潭には、

360度、どこを見渡しても地平線の果てまで茶畑という世界でも稀に見る連続した茶園『中国茶海』があつた。その規模には正直圧倒され、声も出なかつたが、一体こんなに茶畑を作つてどうするつもりなのだろうかと思つてしまつた。貴州は緑茶の産地として有名だが、いつの間には雲南省を抜いて、中国一の茶畑面積を誇る省になつていくよつた。

この近くの観光茶園を見学したが、そこでも『茶園を散歩するのに30分では戻りません』と言われ、驚いた。確かに歩いて行くところでも茶畑なのだ。しかもその茶畑には畝ごとにプレートが建てられており、1反地主ならぬ、1亩出資者が延々と名を連ねていた。これは約1万元(日本円約17万円)を支払つと、5年間その茶園で採れる茶葉をもらい受ける権利があり、茶園管理から製茶までは全てこちらの茶業者が行う仕組みになつている。地元農民の雇用促進にも繋がつていく政

策だ。

これは茶商が販売する茶葉を安く確保できるメリットがあるとのこと、で受け取つた茶葉を販売できれば儲けが出るという。既に全中国から数百の応募があり、一部業者からは『茶葉を売るのはではなく、茶園ごと売る新商法』とも言われているよつた。貴州省の田舎、大自然の中で栽培される茶として



写真:英徳郊外のCSR茶園

の宣伝効果もかなり期待できるといふ。更には貴州省政府が推し進める観光業とのタイアップもあり、政府からの補助も含めて、大規模な資金が動いていく。

ただ残念ながら貴州省は如何にも遠い。中国人にとつても近い場所として、先日広東省の英徳を訪問した。ここは英徳紅茶が有名な場所だが、広州から高速道路で僅か2時間ながら、まだかなりの自然が残されている地域だ。この郊外の大自然の中に、茶工場があつた。その横にはきれいなショップがあり、ゆつくりとお茶が飲める。山の向こうには宿泊施設もあり、温泉も出ているという。

ここにも1反茶園が存在していたが、その出資額は5年間で8万元(日本円136万円)にもなるらしい。こちらもコンセプトは貴州と同様だが、出資者には茶業とは関係なさそうな名前が並んでいた。責任者によれば『自然を守る、持続的な雇用を生み出すな

ど、社会貢献の観点から協賛してくれる企業が多い』というから、なるほどと思つてしまつた。茶園から受け取つた茶葉を自社名でパッケージして企業PRとして活用する、『茶畑でCSR』、そういう時代なのかもしれない。

そしてこの自然の中の宿泊施設を社員の保養地、福利厚生施設の一つとして使うという手もあるらしい。茶の季節になれば社員や顧客が茶摘みに訪れる、温泉に浸かりに来るなど、当然格安で利用できるもので、これからの中国の民営企業にとっては、従業員対応上も、顧客への印象度からも、ちよつとよい取り組みなのかと想像する。

日本でも茶園と観光を組み合わせたティーツーリズムという言葉は聞いたことがあるが、その実態はどうだろうか。中国の真似をする必要などないが(真似できるとも思えないが)、観光茶園には様々な形があり、それはときに非常に有益な効果を発揮するケースもあるのではないだろうか。(すが つとむ)